

小特集・研究者というメディア

昔話研究の成果を現場に 活かす試み

小澤俊夫

日本の昔話研究は、柳田国男、関敬吾らによつて拓かれ、その伝統の上にたつて進められている。

そこで重点が置かれているのは民俗学、宗教民俗学、日本文学の視点に立つた研究である。その意味での昔話研究は永年積み重ねられ、大きな成果をあげている。研究の緻密さにおいて、日本の昔話研究は、世界のトップクラスにあると言える。

ところで、農村や家庭での日常的な口頭伝承がほとんどなくなつた現在、つぎの世代を形成する子どもたちはどうやつて昔話を受け取つてゐるかといえば、本、絵本、アニメ、人形劇、劇、そしていわゆるストーリーテリングなどによつてである。そこでは何らかの形で文章にひとの手が加えられてゐる。いわゆる再話されているのである。その再話は誰によつてなされているかといえば、主として、児童文学に携わつている人、あるいは児童演劇に携わつている人、あるいは編集者によつてなされているのである。

私は、日本において永年積み重ねられてきた昔話研究の成果と、

現在子どもたちに提供されているいろいろな形の昔話とのあいだには、大きな乖離があると思う。

この乖離をなんとか克服することはできないものか。

上述のように、緻密な研究は永年積み重ねられてきたが、民俗学的研究といい、宗教民俗学的研究といい、日本文学的研究といい、考えてみれば、いずれも昔話の周辺の研究である。それはそれ 자체として重要だし、不可欠であり、貴重な成果をあげてきた。私はそれを評価するに後におちるものではないが、現在の子どもたちに上述のような様々な形で昔話を再話して手渡すときには、ごく間接的にしか助けにならない。

それゆえ、昔話に手を入れる人は、昔話というものは、だいたいこんなものではないか、という自分の感覚で手を入れてしまうことになるのだろう。その人が、子どもの頃、昔話を聞いて育ったならば大きなあやまちはしなくてすむだろうが、そういう人はほとんどいないだらう。

昔話に手を入れるということは、昔話の内部をいじることである。そのとき、昔話の周辺の研究がごく間接的にしか助けにならないのは、これは当然であろう。そうであるならば、昔話の内部の研究がなされなければならないし、その研究がひろく世の中に提供されなければならぬ。

昔話の内部の研究といえば、構造論、様式論、イメージ論が考えられる。これらの研究は昔話を再話する際に大きな助けになるものである。

構造論については、ウラジーミル・プロップやアラン・ダンダスの有用な研究がある。様式論については、マックス・リュティの優れた研究がある。イメージ論については、まだ緒についたばかりだが、試みは動き出している。

昔話の再話者が最低限、ぜひとも身につけておかなければならぬ方法論は、様式論である。

昔話の様式的研究は、ヨーロッパでは二〇世紀初頭から始められていた。そして現在までのところ頂点に到達したのが、マックス・リュティの研究である。

その理論は、一九四七年『ヨーロッパの昔話　その形式と本質』の前半部分において発表された。

彼は、自分の研究はヨーロッパの昔話の分析の結果であり、他の地域の昔話はまったく考察の外にあると述べている。私は一九五〇年代にこの本にめぐりあい、日本語に翻訳し、一九六九年に出版した。それ以来、私は日本の昔話の様式はいかなるものかという関心を抱き続けてきた。そして現在では、リュティのいう語り口の法則は、その根本においては、日本の昔話においてもみられるという認識にいたっている。日本のみならず、多くの民族の昔話においてもみられることが、明らかになつた。

私がこの認識にいたるには、いくつかの経験が必要であつた。その一是、もちろんマックス・リュティの理論を詳しく知ったことである。上記書の翻訳を通じて彼と親交を結ぶようになり、永年、学問上の話をることができた。私には、かけがいのない経験だった。

その二是、ドイツで出版されている世界最大の昔話シリーズ『世界文学のメルヒエン』のうち、主要な巻を邦訳した三七巻のシリーズ『世界の民話』の編集と翻訳の仕事である。この仕事を通じて、リュティのいう語り口の法則は、ヨーロッパだけでなく、どの民族の昔話にもはたらいていることを実感した。

その三是、稻田浩一氏の依頼によって共同編集責任者として参加した『日本昔話通観』での理論的な仕事である。この仕事において私は、日本昔話の分類、整理には、基本的な作業として、個々の昔話を構成するモティーフの確認が不可欠と考えた。そこで、試行錯誤の末、モティーフ分析法を考案し、その方法で、典型話として全文が掲載される話をすべてモティーフ分析した。もちろん、他の編集委員が私の分析法にもとづいて分析した話もあるが、本格昔話の大部分は私が詳しく分析した。数年を費やしたこの分析作業を通じて、私は、日本の語り手たちも、基本的には、リュティのいう語り口の法則にのつとっていることを確認した。

その四是、日本の伝承的な語り手たちから直接昔話を聞くことができたことである。その意味では、日本は恵まれた国だと思う。特に、すぐれた語りからは、リュティのいう語り口の法則が明瞭に聞き取れたのは、驚きでさえあつた。

これらの経験を通じて、マックス・リュティのいう昔話の語りの法則が、日本の昔話にも生きていることを知つた時、私は、このような様式論研究の成果を、昔話の再話や絵本制作などの現場に活かさなければならないと考えた。そればかりか、再話や絵本を毎日の保育活動に使つて保育園や幼稚園の先生達、そして本から昔話をおぼえて語つて現代の語り手達が本を選ぶ時の、助けになる

ようにならなければならないと考えた。

そういう考え方を抱きながら一〇年程経過した。その間は、大学での教育、研究そして大学運営上の仕事に忙殺されていた。

筑波大学での副学長の任期が終わる時、これから得られるであろう比較的自由な時間を何に使おうかと考えた。そのとき思い付いたのが「昔ばなし大学」である。上述のように、二〇世紀において進歩した昔話の様式論をいろいろな意味での現場に活かしたい。しか

もそれは、一部の児童文学者が知つていればいいことではなく、日本各地で毎日子ども達に語つたり、読んでやつたりしている人達

に知つてもらわなければならない。そう考えると、自分が各地へ出かけて行かなければならないと思った。それはかなり大きな運営体になる。しかし考えてみると、自分は永年大学でいい教育を実行するためのカリキュラムを構築してきたし、大学の管理運営にも参加してきた。その経験を活かせはある程度のことはできるのではな

いか。

そう考へているうちに、協力してくれる人達がつきつぎに現れて、一九九二年一月、旭川で「旭川昔ばなし大学」を開講したのである。授業には、講義、講読、演習三形態がある。一こま八〇分。土曜日午後から始めて三こま。翌日の日曜日朝から始めて三こま。二日間で六こまの集中授業である。それを年二回行う。そして三年継続する。結局三年間で三十六こまの授業を受けることができる。これをもつて、基礎コースとする。

基礎コースの中心をなすのは、様式および語法についての講義とリュティの理論書の講説である。これには、受講生が内容をよく理

解できるように、実例を分析する宿題を課する。

昔話の再話についての大先輩はグリム兄弟なので、その再話法についての講義も行う。様式および語法についてある程度の理解が進んだところで、日本で出版されている再話をとりあげて、その批判的検討を行う。

幼い子を対象として活動している人にとっては、昔話絵本が重要な役割をもっているので、昔話絵本は二回にわたってとりあげる。三年間で三十六こまの授業を受ければ、昔話の様式と語法についての基礎は修得できると思う。その先は各自の学習と経験によって深められるであろう。

なかには、こうした基礎的な力に基づいて、土地言葉によつて記録されている昔話や伝説を、共通語に再話したいと考える受講者もいる。そのような人々には、「再話コース」を用意している。二年間で合計二四こまの演習である。各自が、(一) 再話したい話、(二) 再話できると思う話、(三) 再話する価値があると思う話、といふ三基準に従つて候補話を選んでくる。提出者の説明を聞きながら、私が再話の勉強に適当と思われる話を選ぶ。受講者はグループを形成して、それらの話を次回までに再話してくる。そして、私がおよび全受講者の批評を受ける。これをくり返して完成させる。検討会では、議論百出するが、常に、耳で聞いて場面が目の前に浮かぶ文體をめざしての議論なので、それ自体が勉強になっている。そして、くり返し耳で点検していく。昔話という文学を耳に返したいと思つてゐるのである。

現在では、昔話の再話といえば、じく僅かな児童文学学者によつて

行われているが、耳で聞いてわかりやすい再話をするとの出来る人が日本のあちこちにいる、という状態になつたら、昔話が生きて伝承された時代にすこし近付くのではないかと期待している。

そろそろ再話コースの成果を、世に発表する段階になりつつある。基礎コース終了後、昔話を語りたいという人もいる。そういう人の為には、「語りコース」を用意している。基礎コースの「語りと講義」を担当しているベテランの語り手が、約一年半、六回の講義と実技指導を行つ。この場合にも、基礎コースで学んだ様式と語法についての理解が、よい語りを生み出している。

以上、昔話の研究と子どものための絵本や再話とのあいだの乖離をすこしでも埋めるべく、私がしているささやかな試みを報告した。

この試みのなかで私を励ましてくれるのは、私の考え方を理解して、熱心に勉強する人がたくさんいるということである。一九九二年から第一期には、旭川から鹿児島までの一〇都市で、つぎの第二期には、旭川から尾道までの一三都市で、現在進行中の第三期には、旭川から那覇までの一四都市で開講している。その人達が、学んだことを活かして、子ども達のために、昔話本来の形を保つた絵本や再話を選んでくれたら、私はうれしい。そしてそれをまわりの人達にも広げてくれるだろうと期待している。

昔話の様式論を専攻してきた者として、人類の貴重な文化財である昔話を、口伝えされてきたその形で子どもたちに渡すことに研究を活かすべく、これからも力を尽くしたいと思つてゐる。

(おざわ・としお／筑波大学名誉教授)

小特集・研究者というメディア

現代若者の「**口承**」世界を フイールドワークすること

——『市川の伝承民話』の試みを例として——

根 岸 英 之

はじめに

一九八〇年代から、「口裂け女」や「学校の怪談」などへの関心が深まり、これらの話の収集は「現代民話」「現代伝説」「都市伝説」などの呼称の下、進展を見せてゐる。しかし、これらの資料の多くは、(1)アンケート用紙を用いた筆記回答であること、(2)「怪談」や「怖い話」を中心とした収集であること、(3)話のみを独立的に扱い「話×生成の〈場〉」(文脈)への言及が少ないと、(4)話の内容(モティーフ)分析が中心で表現(ディスクール)への言及が手薄なこと、などから、「**口承文芸**」研究のアプローチとして、いささか不満を感じてゐる。

本稿では、論者自身の関わった現代若者へのフイールドワークを基に、論者がどのように介在しどのようにすることを試みてきたのかを紹介し、研究者というメディアとしての自覚を促すものである。